ＮＨＫ函館放送局開局８０周年と「ドン」の移り変り

中尾 仁彦 さん　箱館歴史散歩の会主宰、第１回 函館検定 上級試験合格、ＮＨＫラジオ「どどんと道南ラジオ」に月１回レギュラー出演中。

現在はテレビやラジオで時報があたりまえに発せられています。テレビは画面上部の時刻表示、またラジオは昔ながらの「ポーン」の形が主流です。

それでは昔はどのようにして時刻を知らせていたのでしょうか。幕末までの各地の城下町では城で太鼓を叩き時を知らせていました。函館も同様で、当時元町にあった箱館奉行所が安政３（１８５６）年に「時の太鼓」を開始したのが最初の時報といわれています。これとは別に、元治元（１８６４）年から数年間五稜郭に移った箱館奉行所（平成２２年に復元された）では、役人の勤務開始の午前１０時と終了の午後３時を太鼓で知らせましたが、当時の役人の勤務時間は大変短かったようです。

太鼓に変わり明治１５年７月から、高砂町（現在の函館市総合福祉センター付近）にあった函館測候所にて旗を用い正午を知らせるようになります。これを「報午旗（ほうごき）」と言います。約３メートル四方の赤白の旗を毎日正午より５分前に竿の中間に上げ、さらに２分前には竿頭に上げ正午になると瞬時に引き下ろします。函館市街地のみならず遠望のおよぶ近隣地域でもこの報午旗を利用して時計の調整をしました。しばらくは「時の太鼓」と「報午旗」が併用されましたが「時の太鼓」は、明治２１年に中止されます。

その後太鼓に代わり大砲の空砲射撃により時刻を知らせるのが全国的に主流となります。明治３５年に函館測候所の旗による正午の時報に代り、この旗の引き下げに合わせて、望遠鏡で見た元町配水場内において正午の午砲（通称・ドン以下同表現）を開始します。このドンを撃つのは配水場の職員が兼ねました。しかし霧が深い時は旗の遠望がむずかしくまた市街地の拡大に伴い音の伝わり方にも差が出始めたため旗の使用は中止されます。そのため明治４２年、函館区はより大型の大砲（５斤砲）を東京兵器廠から購入し空砲射撃を開始します。その後函館は北洋漁業や北海道の玄関口として発展を続け、市街地は拡大の一方でしたので、当然郊外では空砲が聞こえづらくなります。

そのおり、昭和７年２月６日午前６時３０分、汐見町（現在のロープウエイ駐車場）から「ＪＯＶＫこちらは函館放送局です」の開局第一声が響きました。昭和３年の札幌放送局に次いで全道２番目、全国１９番目の開局でした。当時の新聞には、「近代都市の誇り」、「ラジオ黄金時代」と誇らしげに掲載されたほどです。今年は開局８０周年を迎えました。開局によりラジオの時報で時刻は知りやすくなったとの理由で、昭和７年４月１日には市民に正午を告げてきたドンが廃止されます。１年の内に市内のラジオ加入者は 6500、郡部で 1100 という規模にまで拡がりましたが、この頃、市内全戸数は４万戸程であったことから、１０軒に 1、2 軒程度の普及でした。ドンの廃止により市役所の経費は年額 500 円の節減になりましたが、ラジオの普及は前述の程度だったため、ドン廃止に対する市民の不満は大きくなる一方でした。市民が皆ラジオを持てるほどの金持ちだと思っているのか、市長の自動車送迎をやめて経費を節減し、ドンを復活せよなどの声がさかんとなる有様です。

そのため市役所は翌８年１月１日からより遠方まで届くサイレンを銀座通りの市民館屋上に据え付け、正午に鳴らされます。第２次大戦の開戦近くまで続きましたが戦争中は中断されます。サイレンは昭和２５年３月１日に再開、東雲町の函館市消防本部で鳴らされ、平成初期まで続きました。ラジオやその後のテレビの普及により正午を知らせるよりは、むしろ緊急時に鳴らすサイレンのテストの役割もあったと聞いております。

最近は週２日制の普及により若い人たちには「半ドン」は死後のようです。オランダ語で休日を意味するドンタクが長崎出島より入り、土曜日は勤務や授業が半分で終わることから半分のドンタクが短縮されたのが半ドンの語源です。一方、函館では正午のドンとともに半日で仕事が終わることからきているとの説が多く語られます。昼になれば仕事が終わり後は楽しい週末と思えば、午前中の仕事など一瞬で終わってしまったような感覚でした。半ドンを体験していた世代の皆さん、どうでしたか？

旧函館放送局（昭和１１年撮影）
真ん中の建物は、東本願寺別院

ご案内

中尾仁彦さんの「箱館はじめて物語」改訂版（1000 円）をまちセン内 cafe Drip Drop および大型書店で絶賛好評発売中です。電子書籍版は「新函館ライブラリー」**http://hakodate.wook.jp** で購入できます。